

## 地域の多様性と普遍性

浅野慎一(摂南大学現代社会学部)

※ 協同総合研究所『協同の発見』第378号 2024年5月 所収

第2分散会では、3本の報告がなされた。

第1報告は、札幌西事業所の「はちけん地区センター」だ。ここでは、指定管理業務をいわば「入り口」として、多様な地域課題にアクティブに取り組んでいた。たとえば、①利用者ではない見ず知らずの「(自宅等がわからなくなった)迷える高齢者」がきちんと「迷い込める場所」としての対応、②入院治療する子どもたちの両親を支援するボランティア団体との連携・協力、③コロナ禍で孤立する利用者のための模造紙と付箋を用いた展示交流事業等である。指定された施設管理業務にとどまらず、偶然の出会いの中で生み出された多様で創造的な取り組みが、生き生きと報告された。

第2報告は、センター事業団仙台地域福祉事務所けやきの杜の「大野田児童館」だ。ここでは、なかなか思いつかないユニークな発想の活動がなされていた。たとえば、騒いではいけない場所にある児童館では忍者の「忍び歩き」を推奨し、忍者をテーマとする児童館祭りを開催していた。ユニークな発想をおもしろがり、盛り上げていく雰囲気職場にあるのだろう。また、地域特性をつねに把握している点にも感心した。①新住民のための「ウェルカム大野田」、②親子でのポール・ウォーキングで地域の危険箇所を「子ども目線」で発見するイベント、③地域諸団体と協力・連携して児童館祭りを開催し、新旧住民の交流を促進する等である。

そして第3報告は、903シティファーム推進協議会だ。東京の下町・浅草を拠点として、関東の諸地域の個性的な人々・プロジェクトを、「農と食で地域をつなぐ」をテーマに幅広くネットワークしている。高校生から50歳代の人々が参加し、①バケツで稲作をする「よみがえれ浅草田圃プロジェクト」、②江戸野菜を使ったパンを開発・販売する若者の事業支援、③美術大学生によるアートのクラス、④地域の中を循環し、格差を広げない地域通貨の模索等が紹介された。

3報告を通して実感したのは、地域の多様性と普遍性だ。札幌・仙台・東京はいずれも大都市だが、それでも地域の課題も、それに取り組む主体(年齢・属性)も大きく異なっていた。同時に、それぞれの地域で人々が直面している課題に気づき、見て見ぬふりをせず、解決を諦めず、おもしろがり、協同して取り組もうとしている姿勢は同じである。地域を見つめ、地域に根ざし、地域を楽しみ、地域を作ることの大切さを、改めて教えられた分散会であった。